

人間の成長における行為の意味

持つことと失うこと (3)

「もつ」から「ある」「なる」へ

津守 真

「もつ」ことと「もたれる」こと

ひとり子どもが、手放す行為を反復することにより、失うことの意味を発見したとき、自分がしがみついていたものから解放されるのを見てきた。このことから、私は、「持つ」関係について考える機会を得た。

人が何かを「持つ」ことに固執し、手放すことができないとき、逆に云えば、人はその何かに「持たれ」、所有されている。日本語の「憑かれる」という語は、英語の Possessed にあたり、所有されるという意味である。ある観念にとりつかれるのは、その観念に所有される(持たれる)ことだと古代人は考えたことがわかる。物、人、観念、知識、財産、

地位、権力など、何であれ、それを持っているのは自分であるはずなのに、長期間持つて
いるうちに、自分がそれらに「持たれる」者になってしまつて、そのことに気付かない。

それに気付くには、大切に思つていたものが外力によつて奪われねばならないこと
もある。外的には失われても、内的には手放すことができず、一層それにしがみつき、そ
とりにこなつてしまうこともある。老年期にしばしば見られる現象である。このことは幼
年期からの経験とも関連しているのだろう。そして、その根底には、他者と自分との関係
についての「持つ」——「持たれる」様式の認識がある。

「持つ」——「持たれる」関係だけで考へてしまつと、眞の関係の認識に至らないだろ
う。

「もつ」関係から「ある」関係へ

何かに固執し、あるいは憑かれているとき、主体である自分自身は、その何かと区別し
がたく一体になっている。子どもから大人に至るまで、人は何度もそのような状況に陥
る。その状況からはなれることのできる自分を発見するとき、人は他者と互いに「ある」
関係に立つ。

母親と子どもとの関係において、はじめは母親は子どもを自分の一部のように感じ、子
どもも母親の一部のように感じるときがあるだろう。母と子は「持ち」「持たれる」関係
の中で成長するようにみえる。しかし、じきに、賢い母親は子どもを自分の所有物として

持つのではないことに気付く。子どもは自分の意味で何かをしようとする。子どもには母親とは違う感じ方、考え方、そして独自の人生があること、母親と子どもとの関係は、「持つ」——「持たれる」関係ではなく、互いに独立した人間として「ある」関係に立つことを母親は知るようになる。このことが相互に認識されないと、成人しても、子どもは母親、父親に、あるいは観念の上の母親、父親にとりつかれて、ひとりの独立した人間として自由になれないだろう。

保育の場においても同様である。ある時期には、大人の方も子どもから目が離せないし、子どももその大人をはなさない、しばらくの時、「持つ」——「持たれる」関係がそこにはある。しかし、大人がいつまでも目を離せないと思っていると、子どもは成長しない。保育者にも子どもにも、冒険が必要である。

保育者と子どもとの関係のみでなく、組織の中の人間関係、あるいは組織と個人との関係も同様である。上司と部下、先輩と後輩、組織と個人が、持ちつ持たれつの関係の中で成長する時期があったとしても、それが長くつづいたら、独立した人格としての成長が損われるだろう。

家庭でも、教育の場でも、職場でも、他者はその人自身の人生を生きる、他人には測り知られない畏敬すべき存在である。自分自身の中にも畏敬すべき何ものかがある。他人と自分との間には越えがたい深淵がある。そのような者として、人と人は互いに「ある」関係に立つ。

その上で、人と人は時間と空間を共にして、一緒にたのしみ、ある期間、共同の生活を分かち合う。そのときに、関係は成長し、その関係の中で人は人間となる。

「ある」関係から「なる」関係へ

「ある」関係は、人間同士の関係の基本である。どんなに幼くとも、障害があっても、どのような人も、その人は、いかなる他人や組織の所有物ではなく、自分自身の人生を生きる尊厳な存在である。常にこの認識を忘れることはできない。

実際の日常生活においては、「ある」関係から出発して、具体的な生活が展開する。保育の場では、大人は子どもと出会い、交わり、活気ある生活となるように現在を形成し、省察を重ねる。その一日の中で、子どもは何かを自分でやったという経験をし、大人は子どもと一緒に生きた実感をする。その関係の中で子どもは遊ぶようになり、保育者は支える人間として成熟する。個人が成長するだけでなく、関係自体が成長し成熟する。これは「なる」関係である。

「ある」関係は峻厳である。

「なる」関係には親しきがある。

「なる」関係では、他者と一緒にいることをよろこぶが、その基底には常に「ある」関係を欠くことができない。そうでないと、「なる」関係は、気付かぬ間に、「もつ」——「もたれる」関係に滑り落ちる。

大人になること

「なる」関係の中で子どもは大人になる。

大人になるというのは、能力が増すだけではないし、社会常識に沿って生活できるような人になるということでもない。ある水準に達したら、それで大人になったというような資格を考えるのではない。

大人になるというのは、より一層、人間的成長をすることであろう。大人もまた人間的成長の途上にある。子どもは大人になるのだが、終点があるのではない。子どもも大人も、また老年期も、人間的成長の過程であることにおいて、ひとしい。

子どもが大人になるとはどういうことを考えることはこれからの課題にしよう。

※

朝、保育の場に出るとき、私は子どもたち、大人たちと、「ある」関係に立ち、「なる」関係をつくりたいと思う。きょうの一日の中で、子どもが何かをやったと感じ、私との間で何か人間的経験をするようにと願う。

一日を終えたとき、子どもたちがよく遊び、人間らしく交わったと思えたとき、私は快さを感じる。いろいろの保育者たちが、保育の前には心身に重苦しさを感じていても、保

育の場に出ると治ってしまおうと言う。それは、子どもとの間で、保育の行為によって、「なる」関係がつくられるのを体験し、ささやかなから関係の本質を知るからではなからうか。

(愛育養護学校)

